

1079 ^{125}I -MIBGを使用したhemi-Parkinson model ratへの自家副腎髄質移植片生着性の検討
篠田正樹, 山口 壮, 松澤和人, 佐藤 修 (東海大学 脳神経外科), 小林 真, 鈴木 豊 (同放射線科)

Parkinson病患者に対する副腎髄質移植術は、機能的脳神経外科手術の新しい分野を開発しつつあるが、移植片の生着の確認方法は確立されていない。今回我々は、I-125-Meta-Iodobenzyl guanidine (MIBG) を用い、hemi-Parkinson 及び、非hemi-Parkinson model ratへの自家副腎髄質移植例における生着判定を、macro及び、microautoradiogramにて施行した。

【結果】(1) MIBGによるautoradiogramにて、移植部位と一致したhot spotが観察できた。(2) 尾状核の移植部位には、H-E染色等にて、chro-maffin陽性細胞が多く認められ、autoradiogramのhot spotとの一致が見られた。(3) 健側副腎髄質では平均したMIBGの取り込みを認めた。

1080 異所性甲状腺の臨床像とシンチグラフィ所見
御前 隆, 竹内 亮, 日高昭斉, 笠木寛治, 小西淳二 (京都大学核医学科) 黄 俊清 (京都市民病院内科)

過去6年間に経験した甲状腺の位置異常12例について検索した。7例は舌根部に甲状腺組織が存在し、新生児期の高TSH血症を契機に発見された。これに対し小児期ないし成人になってから発見された舌下部甲状腺腫5例では4例が前頸部腫瘍を、他の1例は咽頭違和感を主訴としており、TSHの軽度上昇がみられた1例を除いて甲状腺機能は正常であった。全体の男女比は1対2であった。嚥胞の合併が1例に、右葉低形成の合併が1例に認められた。マイクロゾーム抗体が2例で陽性であった。母子発症例が1組あった。今回の検討で舌根部のものと舌下部のものでは病像が異なることが判明したがいずれにおいてもTc-99m ないし I-123 によるシンチグラフィは診断に不可欠な、有用な検査法であった。

1081 甲状腺癌骨転移における骨シンチグラフィおよびTl-201シンチグラフィの検討

竹内 亮, 日高昭斉, 飯田泰啓, 幡生寛人, 滋野長平, 御前 隆, 笠木寛治, 小西淳二 (京都大学核医学科)

甲状腺癌において骨転移が存在すると予後不良であり、その検索は重要である。一方、骨シンチグラフィは転移性骨腫瘍の検出に鋭敏であるが、甲状腺癌の骨転移に対する陽性率は低いと言われている。そこで骨シンチグラフィの再評価およびTl-201シンチグラフィの評価を行なった。対象は手術ないしI-131の集積から甲状腺癌の骨転移が明らかな14例、26病変である。骨シンチでは陽性19病変(73%)、陰性6病変(23%)、判定不明1病変(4%)であった。Tl-201シンチではそれぞれ13(50%)、7(27%)、6(23%)であった。骨シンチ単独で73%、Tl-201シンチを併用して85%の陽性率で、骨転移の検索に有用であると思われる。

1082 骨吸収モデルを用いた骨シンチグラフィの基礎的研究 (第3報)

二宮秀一, 江口 徹, 和田真一, 前多一雄 (日歯大新潟放)

演者らは、骨シンチグラフィにおける2-コンパートメントモデル解析から求められるK値、 λ_1 値は、K値が骨血流を表す変数であること、 λ_1 値が骨塩量の増加指数であることを明らかにしてきた。しかし、臨床上で λ_1 値は、骨吸収を示す疾患の場合でも上昇することが認められている。そこで、演者らは、 λ_1 値の意味をさらに検討するために骨吸収モデルを作製し、対照群とともに骨シンチグラフィを施行した。そして、 λ_1 値と血清ALPとの間に正の相関が認められたことを第30回本総会で発表した。今回は、血清ALP アイソザイム分画と骨成分含有比について検討を行い、その結果から、上昇を示した血清ALPは骨型ALPであり、 λ_1 は末石灰化骨有機質の増加を反映している可能性が示唆された。

1083 骨塩量と全身組織量——特に筋肉量との関連について——

游逸明, 大中恭夫, 高田政彦, 増田一孝, 山本逸雄, 森田陸司 (滋賀医科大学放射線科), 重井美佐男 (近江温泉病院放射線科)

骨塩量に影響を与える因子の検討のため全身各部位の骨塩量をDEXA装置(Lunar DPX及びHologic QDR-1000)にて測定した。同時に全身脂肪量、Lean Mass量、体重などを求め各々の因子の全身のどの骨への関連があるかを検討した。対象は20-90才の健康及び骨粗鬆症例、男395例女755例計1150例である。QDR-1000による腰椎骨塩量測定値は体重と正の相関($R=0.56$)を示した。またDPXによる全身骨塩量測定値も体重と正の相関を示したが($R=0.59$)この相関は全身脂肪量ではなくLean Mass(筋肉量)と特に相関していた。全身筋肉量と最もよく相関する骨は下肢骨であり頭骨とは相関がみられなかった。

1084 骨髄炎評価におけるTc-99m WBC, Ga-67 citrate, およびTc-99m MDPイメージングの役割

油野民雄, 滝 淳一, 横山邦彦, 秀毛範至, 高山輝彦, 利波紀久, 久田欣一 (金沢大学核医学科)

骨髄炎または骨髄炎が疑われた症例を対象に、Tc-99m WBC, Ga-67 citrate およびTc-99m MDPイメージングの有用性を検討し、骨髄炎診断における各検査法の役割を明らかにすることを目的とした。MDP検査は、骨髄炎の確定診断法とはなりえなかったが、除外診断およびGa-67やWBC検査における陽性が陰性を決定する際の補助診断法として有用であった。WBC検査は、三検査のなかで骨髄炎の確定診断に最も特異性の高い検査法であり、特に発症早期の急性期の評価に有用であった。一方Ga-67検査は、診断的特異性がWBC検査より低かったものの、発症後一定期間を経過した慢性期や、axial skeltonの部位の病変の評価に有用であった。